

【新聞活用学習】小学校5年生・総合的な学習の時間

「学区内ごみゼロプロジェクト」 ～子どもの探究的な学習を支えるための新聞活用～

指定校2年次 佐久市立佐久平浅間小学校 藤岡 泰裕

（１）本年度のN I E活動の概要

研究指定校1年目では、総合的な学習の時間に「修学旅行新聞を作ろう！」という実践に取り組んだ。この実践を通して、新聞を書くことは新聞について知ることや新聞を読む力をつけることにつながっていることがわかった。2年目の本年度は、新聞記事を総合的な学習の時間に活用して、児童が探究的に学習する意欲を引き出したいと考え実践に取り組んだ。

（２）本年度のN I E活動の取り組み状況（4月時点）

本校は全校生徒740人、29学級からなる学校である。昨年度より長野県N I E研究指定校をうけたことを機会に、授業のなかに積極的に新聞を取り入れ、一般社会で起きている問題や課題解決に対する世の中の人々の取り組み方などを身近に感じられるよう「新聞コーナー」を廊下に設置してきた。これにより、児童は休み時間に足を止めて新聞記事を読むようになり、友と社会で起きている問題やさまざまな活動について会話することが増えてきた。さらに、本年度は5学年の廊下に1学期は2社の新聞、2学期は5社の新聞の閲覧台を設置することにした。これを活用して、5学年各学級で定期的に新聞スクラップを行う計画を立てた。各教科においては、4学年では国語科「新聞を作ろう」の学習、5学年では国語科「新聞を読もう」の学習で信濃毎日新聞社の出前授業をお願いすることに決めた。本年度の研究授業学級の児童は32人。新聞を購読している家庭は約半数のため、新聞に目を通して児童は多くない。

（３）N I E活動のねらい

本年度7月、5年3組で行われた総合的な学習の時間「レジ袋の有料化は、プラごみ問題に効果があるのか考えよう」では、「来年4月にもレジ袋有料化」「G20閣僚会合 軽井沢で開幕」（信濃毎日新聞6月15日付夕刊1面）という見出しの新聞を授業の導入で提示した。この記事を読んだ児童は、「プラごみ問題は自分たちにとって身近な問題なのか？」「レジ袋有料化はプラごみ問題に効果があるのか？」という疑問をもって、意欲的に追究を始めた。

そこで本年度は、教師が新聞記事を活用して児童が探究的に学習する意欲を引き出すことをねらいたい。そのために、児童が新聞記事の内容は自分たちにとって身近な問題であると気付けるような調査活動を取り入れることを考えた。

また、児童が新聞記事などの情報を根拠にして友と意見交換することで、考えを深めることをねらいたい。このように考え「子どもの探究的な学習を支えるための新聞活用」をN I E活動のねらいに設定した。



(4) 本校での取り組み（実践事例から示唆されたこと）

- 1 新聞記事が、調査活動によって身近な問題であるとわかり、児童の意欲を引き出すことにつながった事例

総合的な学習の時間

「レジ袋の有料化は、プラごみ問題に効果があるのか考えよう」～A児の姿から

導入時	教師が「来年4月にもレジ袋有料化」「G20閣僚会合 軽井沢で開幕」という見出しの新聞記事を提示すると、S児は大切だと思う文章に線を引きながら、熱心に記事を読んでいた。また、記事を読んで思ったことを進んで発言したり、「本当に学校の周りにごみがあるのか？」と友の発言をメモしたりする姿があった。一方で、A児は机に伏して、この時間、学習への意欲をもつことができなかった。時折、友の発言に耳を傾けたり、教師が板書する友の意見に目を配ったりする姿は見られた。
展開時	ごみ問題に興味を示した児童の発言により、学校周辺のごみ拾いを行ってみると、プラごみがたくさん落ちていることが分かった。ここでは、A児が進んで活動に参加している姿が見られた。また、プラごみ問題の現状について知りたいという児童の気持ちが高まり、過去の新聞やインターネットをつかってプラごみ問題に関する情報収集を行った。『「レジ袋有料化はプラごみ問題に対して効果があるのか』について、自分の考えの根拠となる資料を集める』という課題に対して、パソコンを使って進んで調べているA児の姿が見られた。
まとめ	調査してきたことを基に「レジ袋有料化がプラごみを減らすのに効果があるのか」意見を出し合う場面では、「効果がある」「どちらともいえない」「効果がない」の立場に分かれて活発な意見交換が行われた。A児は「効果がある」という考えをもって、授業に参加している姿があった。A児の手元にはごみ拾いをした体験や情報収集をした内容をまとめた言葉が記してあり、それを基に友へ自分の考えを伝えていた。



考察

導入時のS児の姿は、教師が新聞記事を提示したことにより、「レジ袋有料化」や「プラごみ問題」が世界中で大きな問題となっていることを知り、そのことに対する追究意欲をもつことができた姿だと捉える。一方でA児の姿は、記事と自分の生活とのつながりを捉えにくく、自分の身近で起きている問題と感ずることが難しかったためではないかと考える。また、展開時からまとめにかけてのA児の姿は、児童の興味・関心に基づいて学校周辺のごみの状況を調査する活動を行い、身近にあるプラごみの多さを実感したことにより、記事と自分の生活とのつながりを捉え、「プラごみ問題」を自分の身近で起きている問題として意欲的に追究していった姿と捉える。

示唆されたこと

教師が児童の興味・関心を捉えて新聞記事を提示することにより、児童が世界中で大きな問題となっていることを新たに知ったり、それに対する追究意欲をもったりすることができる。さらに、新聞記事に関わる身近で起きている問題について調査する活動を行うことにより記事になっていることが自分たちの生活に直接関わっていること、自分たちの身近で起きていることが世界的な問題とつながっていることを実感することができる。

2 新聞記事などの情報が児童の語る根拠となり、自分になかった考えに触れ、さらに考えを深めていくことにつながった事例

総合的な学習の時間

「同じ立場の友だちや違う意見の友だちと話し合い、自分の考えを深めよう」～R児の姿から

総合的な学習の時間「レジ袋有料化がプラごみを減らすのに効果があるのか」を考える場面では「効果がある」「どちらとも言えない」「効果がない」という3つの立場に分かれて、意見を出し合った。R児は、全体追究の前にグループごとに分かれてアイデア交換をした際「(レジ袋有料化によって)エコバッグが増えるかもしれないけれど、他のプラスチックのもの(スプーンやフォーク)を有料化したほうがよい」という理由で「どちらとも言えない」と発言をしていた。全体追究の場面では、友の過去の新聞記事やインターネットの情報、家の人に聞いたことを根拠としたさまざまな意見に耳を傾けていた。

○全体追究の場面で出た友の発言

①プラごみの内訳について

「プラごみのなかの2%がレジ袋だから、意味がない」

「残りの98%をどうにかしないとイケない」

②マイバッグについて

「おしゃれなマイバッグが増える」

「主婦が(マイバッグを使って)レジ袋を買わなくなるから、減る」

「(有料化は)3～10円になるらしい。7円以上なら自分は買わない」

「服(を買うとき)や100円ショップにマイバッグを持っていく人はいない」

③海への影響について

「海では死んだ魚の体の中から、マイクロプラスチックが出てきた」

「千曲川は海に流れているから、ポイ捨てしたごみを魚が食べてしまう」

④プラに依存する世界について

「プラはすぐれた材質で、ない暮らしは考えられない」

「世界でまた考えたほうがいい」 など。

R児は友の意見を聞きながらメモを取り続けた後に「(考えが)変わりました。効果があるとは言えないと思います。エコバッグに食料品とか全部入れるのは嫌だから、レジ袋を減らしても意味がない」と発言した。また、R児の学習カードには「効果があるとはいえない。レジ袋よりも多いプラごみをもっとあるから」「国の問題になるくらいだから、レジ袋の問題が2%で、他のプラごみ問題が98%なのがびっくり。海ではいろんな人がポイ捨てしたせいで、海の生き物が死んでかわいそう」と本時の学習を振り返っていた。



考察

R児の姿は、資料を根拠とした友の考えを知ることで「レジ袋はプラごみ全体の2%しかないから、効果があるとはいえない」という、新たな根拠と考えをもった姿と捉える。

この授業後に、教師が「レジ袋のごみの量は、年間約18万トンになる」ことを伝えた。すると児童は「2%でもすごい量になるね」と驚いていた。また「2%でもこれだけの量になるなら、レジ袋を減らすことはやっぱり必要かも」と言う児童もいた。この姿は、教師が新たな視点として、年間に出されるレジ袋のごみの量を重さで具体的に提示したことにより、児童が「2%だから効果があるとはいえない」という自分の考えについて、見直す必要があると感じることにつながったと捉える。

示唆されたこと

新聞記事は、自分の考えをもつための根拠となる。また、根拠から考えたことを意見交換してお互いの考

えを知ることにより、児童が新たな考えを構築していくことができる。

児童が興味・関心をもったことに対して、教師が新たな資料を提示したり、問い返したりすることにより、児童は考えをさらに広めたり深めたりしていくのではない。

（５）公開授業などの活動内容

単元名「学区内ごみゼロプロジェクト」（小学校５学年・総合的な学習の時間）

① 単元設定の理由

本学級には、課題に対して自らの考えをもって追究できる児童や発言できる児童が多い。総合的な学習の時間で取り組んだ「レジ袋有料化がごみ問題に対して有効なのか」について考える場面では、レジ袋有料化がプラスチックごみを削減するために、「有効」「そうとは言えない」「どちらともいえない」という３つの立場で意見を出し合った。児童は、自分の考えの根拠となるプラスチックごみに関する情報を新聞記事やインターネットから集めて考えを発表した。そして、さまざまな観点から出される意見交換を通して、自分になかった考えに触れ、さらに考えを深めていく姿が見られた。

しかし、この学習に積極的に関わることができていない児童の姿も見られた。これは、「レジ袋有料化がごみ問題に対して有効なのか」という議題が、本人の生活と結び付かず、自分と関係のある問題と感ずることができなかったものと考えられる。２学期に入り、再びごみ拾いをした児童が、ごみの減っていない現状を見て、身近に起きている現実を何とかしたいという思いをもつようになった。

そこで本単元では、「学区内のごみをゼロにしよう」という願いの達成を目指して、一人ひとりが考えたことを実行していく、学級の宝の活動を展開する。地域のごみを無くしたいという願いに向け、それぞれの課題を見付けて追究していく児童に、課題解決に即した過去の新聞記事を提示することで、解決への見通しをもたせることができるだろう。また、ごみ拾い調査を繰り返す中で、身近な川のごみ問題と海洋プラスチック問題との関係を深刻に捉え出した児童が、海洋プラスチックに関する新聞記事を読むことで自分の感じた危機感をみんなに伝えたいと思い、より意欲的にプロジェクト活動に取り組むだろう。このような児童の姿を願い、本単元を設定した。

② 単元目標

学区内のごみを無くしたいと願う児童が、ごみ拾い調査を繰り返し、一人ひとりが考えた「学区内ごみゼロプロジェクト」を実行する中で、自らの課題を見付け、見通しをもって解決し、友と協力し試行錯誤しながら願いを実現していくことができる。

③ 評価規準

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
具体の評価規準	①新聞記事などの資料から得た課題解決の方法のよさを理解し、活用している。	②共通の願いの達成のためにみんなで伝えたいことやそれぞれ解決したいことを見出している。 ③ごみ拾い調査の結果や新聞記事等の資料から課題解決に必要な情報を集めている。 ④ごみゼロに向けたＰＲ活動をしている。	⑤ごみ問題に対して進んで考え活動しようとしている。 ⑥困ったとき、友に相談したり、アドバイスをもらったりしている。

④単元展開（全 24 時間）

○主な学習活動 * 児童の姿や意識			○教師の支援 □評価	時数
①身近なごみ問題について、自分たちがどんな活動をしていきたいのか考えを出し合う。 ＊レジ袋の問題で海の生き物が苦しんでいることがわかった。海に流れ込むごみについて調べたい。 ＊佐久の川も海につながっているから、近くの川にどれだけのごみがあるのか調べよう。 ＊川にはどんなごみが多いのか調べてみたい。			○7月の活動を振り返り、新たな課題を見付けさせる。 評価②	1
ビラ配りプロジェクト	エコバッグプロジェクト	ポスタープロジェクト	○プロジェクトごとに、どうすればごみの現状を知ってもらう活動になるのか考えるよう促す。	
＊ビラに川のごみに関するメッセージを書こう。	＊1学期の学習で話題になった、エコバッグを作ってみよう。	＊濁川の現状をポスターにまとめたいな。		
②濁川のごみを調べる。 ＊80mしかごみを拾っていないのに、15kgも落ちていた。 ＊プラスチックのごみは汚れていたり、ボロボロに破れたりしていた。 ＊濁川だけでおよそ 3000 kgのごみが落ちている計算になるよ。佐久市はたくさんの川があるから、すごい量になるな。 ＊もっと拾わないと、ごみがすべて海へ行ってしまう。 ＊今まで海のことだから他人事だったけれど、自分たちの川も海洋汚染の原因になっているなんて信じられない。 ＊もっと下流に行ってごみを拾おう。 児童の願い：濁川をきれいにしたい。 ＊これだけごみがあるから、僕たちだけではどうしようもできないな。 ごみの現状を知ってもらい協力してほしい→人がたくさんいる場所でPR活動をしたい。 ＊イオンモール佐久平や佐久平駅のように人がたくさんいる場所でPR活動をしたい。			○身近な川でのごみ拾いを通してごみ問題の深刻さを感じさせる。評価⑤ ○ごみの重さを数値化し、児童に提示する。 ○身近な川と世界の問題を結び付ける新聞記事を提示する。評価③	8
③多くの人にごみ問題について真剣に考えてもらうためには、誰に何を伝えることが大切なのか考える。 ＊濁川でごみ拾いをした。80mだけなのに、〇〇kgもごみがあった。濁川全体だと〇〇kgにもなることを伝えたい。 ＊川のプラスチックはボロボロだったから、佐久の川にもマイクロプラスチックがあることをPRしたい。 ＊佐久の川から流れたプラスチックが海洋プラスチックになって生き物を苦しめていることをわかってほしい。 ○プロジェクトごと活動の計画を立てる。			○PR活動をするために、計画を立て直す場を設ける。評価②	2 (本時)
④どのようなPR活動がイオンモール佐久平や佐久平駅ではできるのか考えて準備しよう。			○イオンや駅の下見で、担当者に聞きたいことを考えさせる。評価②	2
＊PRになるような物を配ってもいいか。	＊どこでエコバッグが配れるか。	＊よりたくさんの人にPRできる時間はいつか。		
＊ごみの写真や重さを短く書いて、わかりやすいメッセージカードを作ろう。 ＊ポスターグループと協力して、キャッチフレーズを同じにして伝えていこう。	＊みんなが受け取ってくれるきれいなエコバッグを作ろう。 ＊実際にバッグに荷物を入れて、友だちに持ってもらおう。 ＊ごみの写真があると、説得力があるね。	＊いろいろなポスター例を参考にして、色合いや濁川の現状を伝えていこう。 ＊ポスターには、濁川のごみの写真を掲載しよう。	○新聞記事にある過去の実践例を児童の活動に合わせて提示する。評価① ○困ったときは友に相談したりアドバイスをもらったりするよう促す。評価⑥	8
⑤イオンモール佐久平や佐久平駅でPR作戦を実行する。			○イオンや駅でごみゼロに向けたPR活動をする場を設ける。評価④	2
＊もらった人がメッセージに書いてあった写真をじっくり見てくれた。	＊ごみの現状を伝えるメッセージを読んで「早速使うね」と言ってくれた。	○ポスターを見て、ごみについて質問してくれた。		
⑥活動の振り返りをする。				1

* 佐久平周辺の人たちに、身近なごみについて意識して見てもらえた。 * 県でPRするとなると難しいかな。	* たくさんの人にバッグを配れなかった。もっと簡単にたくさん作って配れば、レジ袋が減らせるね。	* たくさんの人が見てくれるようにポスターにすることができた。 * もっと人がたくさん集まる所でPR作戦ができるように計画したい。	○ 2学期の活動を振り返り、課題を出し合うことで今後の活動についての見通しをもたせる。 評価②
今回のPR活動の成果があったのか濁川にごみ調査へ行こう。			

⑤本時案

・本時の主眼

ごみ問題の危機感を伝えたいと考えている児童が、新聞プロジェクトの提案する記事の内容について、自分たちのプロジェクトの内容と比較して考え、話し合うことを通して、自分たちの体験や具体的に協力してほしいことを伝えることが大切だと気づくことができる。

・本時の位置（全 24 時間中 第 10 時）

前時：プロジェクトごと何をどのように伝えればいいのか考えた。

次時：どのようなPR活動がイオンモール佐久平や佐久平駅でできるのか考えて準備する。

・本時の展開

段階	学習活動	・予想される児童の反応	○指導と援助 評価	時間
導入	1 新聞プロジェクトが自分たちの課題を伝える。	・新聞に「濁川から 31kg のごみが出て、すでにマイクロプラスチックになっている」「2050 年にはごみの量が魚の量を超える」「世界で 10 万羽の鳥が死んでいる」という 3 つのことを書こうと考えています。この 3 つを伝えれば読んでくれた人が協力してくれるのか不安です。内容の付け足しや変更があれば教えてください。 ・僕たちは衝撃的な内容で強く伝えたいからこの 3 つの記事にしました。	○新聞プロジェクトがどうして 3 つの内容に絞ったのか伝えるように促す。	5
	学習問題：新聞プロジェクトの記事の内容で自分たちの思いは伝わるだろうか。			
	学習課題：自分たちのプロジェクトで考えた内容と比べて、3 つの記事が協力してもらえものになっているのだろうか。			
展開	2 新聞プロジェクトの課題について話し合う。	・10 万羽の鳥が死んでいるということは事実だけど遠い話だから、身近な濁川のことを載せていこうよ。 ・でも、10 万羽の鳥が死んでいるという強烈なことを載せないと注目してもらえないよ。 ・私はごみ拾いを頑張ったし、匂いがきつかったから、そういったことを載せたほうがいいと思う。 ・2050 年のように未来のことを載せるより、エコバッグ所有者を増やしていこうのように今協力してもらう必要があることを載せたらどう。 ・このまま何も改善されないとプラご	○プロジェクトごとに自分たちの活動を確認し、新聞プロジェクトと比較して意見を出すように助言する。 ○提案の根拠を問うことで、学習してきた内容を振り返る場を設ける。 ○児童がさまざまな観点の考えに触れられるよう座席表を用いて指名する。	25

ま と め	3 新聞プロジェクトが話し合いの中で気づいたことを伝える。	みの方が魚より多くなるということは、僕たちも聞いて焦ったから、これは載せたいな。 ・魚よりプラごみの量が上回らないように、「ごみを減らそう。そのためにもエコバッグを持とう」にしたかどうか。 ・ごみの怖さだけを伝えれば協力してもらえると考えていたけれど、自分たちが体験した臭さを伝えたり、協力してもらうことを具体的に載せたりすることが必要だということがわかった。 ・エコバッグに入れるメッセージカードにも自分たちがごみ拾いをした濁川について書いていこうよ。	○新聞プロジェクトが話し合ったことをどう生かすのか発表するよう促す。 ○話し合いを参考に、各プロジェクトでも、どのように生かしていけるのか考えるように促す。 ○時間がある場合はそれぞれの活動の続きを行っていくよう伝える。	10
	4 本時の振り返りをする。	・ポスターに濁川の写真を入れて、ごみの汚さを伝えていきたい。 ・私たちももう一度見直して、具体的に協力してほしいことも考えて、お便りを書き直したい。 ・今回アドバイスをもらったことを生かして、新聞の本文を書いていきたい。 ・ビラに載せる協力してほしい内容を考えていきたい。	○大切なことが何か考え、新聞プロジェクトに伝えたことのよさや友のアドバイスを基に考え直したことを評価する。 新聞プロジェクトの内容と自分たちのプロジェクトの内容を比較して考え、体験や協力してほしいことを伝える大切さに気付くことができる。	5

評価2

(6) 児童の反応（ビラ配りプロジェクトグループの記録と考察）

	全体	ビラ配りプロジェクトグループ
導入	A児「新聞にこの3つの題材を書いていいか、相談にのってもらいたい」 教師「自分たちのプロジェクトと比べて、3つの題材が協力してもらえるものになっているか考えよう」 →プロジェクトごとに相談	R児「私たちは鳥のこと書いてない。いいのかな」 ビラを見て同じ部分違う部分を出し合う。
展開	→全体で意見を出し合う。 B児「ごみを拾ったときに感じた、汚いとか臭いとか、その時思ったことを書いたほうがいいんじゃないか」 C児「自分たちができる事を載せればいい」 D児「濁川でごみ拾いをした距離と、拾ったごみの種類をのせる方がいい」 教師「エコバッグプロジェクトだけ、他のグループとちがうのは、わかる？」 D児「エコバッグをもってもらって、レジ袋のごみをなくす」 E児「拾ったごみのなかにレジ袋があった」 教師「どれ位？」 E児「あれ」と掲示してある模造紙を指す。	R児「うんうん」とうなずく。 R児「ポイ捨てを止めるためどうすればいいかだ」 R児「止めるためにやること。他のとはちがう話題だから載せればいい」

教師「何トン減らせるの？」 E児「18.8トン！」 教師「Rさん、これをのせるのはどう？」 「これなら、協力してもらえそう？」 教師「他のプロジェクトも見直そう」 →プロジェクトごとに相談	R児「うん」 「うん」 R児「全部入れるのは、難しそうだね」 ビラに書いた「①対策②動物の被害③濁川の様子」を見ながら検討していた。 R児「③は長さ、距離、量、感じたことが書けていて、これでいいと思う」 R児「あとは、エコバッグを持ってもらうことを書いて知らせよう」
--	---

—考察—

R児の姿は、新聞プロジェクトが提案する記事の内容を自分たちのプロジェクトの内容と比較して見直したことで、自分たちのプロジェクトに何を取り入れたいか見通しをもつことができた姿だと捉える。また、教師が「エコバッグプロジェクトだけ他のグループとちがうのわかる？」と問い返したことをきっかけにして、伝えたいことがばらばらであった児童が、自分たちが体験したことや協力してほしいことを伝えたいと考える姿につながったと捉える。

（7）成果と課題

・授業後のご指導から（○：成果 ▲：課題）

○今日の授業からは、N I E研究テーマとのつながりを感じる。研究テーマが学校目的からおりてきていて方向性がある。多様性が探究的な学びになる。

○班での相談や情報の再確認によって、何をどう伝えるかが明確になってきていた。

○新聞を見返しながら話し合っていたので、新聞が児童の発言の根拠になっていた。

○新聞は世の中が凝縮されている。プラごみの問題は耳では知っている。それを新聞活用してとらえなおす。子どもたちにとって、社会の情報に触れていることは大事。そして新聞記事と実体験（取材）はセットである。現場に行ってみる実感五感で感じること、これを通して問題をとらえていく。そして、多様な視点で1つの課題を見ていく。深くかかわっていく。

▲子どもたちは、川のごみ拾いをして衝撃的な体験をした。その体験から、ポイ捨てを止めるためにやること、協力してほしいこと、この子たちにしか書けないことがあると思う。この町から濁川からプラごみをなくすために、今後どうしていくのか。

▲「プラごみの中のレジ袋の量が2%」ということは、とんでもないこと。教師が出るときには出て、児童の思いをどんでん返しすると学びが変わったかもしれない。

・今後の展望

今回の学習を通して、教師が新聞記事を提示するとともにその記事に関する体験をすることで、児童の興味がわき自分の問題として捉え、追究が深まっていくことがわかった。一方で、児童が新聞記事の内容を理解することや自分に必要な情報を取捨選択することの難しさもわかった。また、児童の追究をさらに深めるには、教師が捉えさせたい内容に気付かせる手立てを準備しておくことが必要である。

今後も、児童の追究を深めるために新聞記事をどの場面で活用できそうか研究していきたい。それと同時に、活用する新聞記事を吟味して、その記事のどの事実でどのように学習を深めるのかの教材研究も行っていきたい。